

剣仁美の特別の教科 道徳（第5学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

平成30年度から道徳の時間が「特別の教科 道徳」（以下、道徳科）となる。道徳科の目標は、道徳性（よりよく生きようとする人格的特性）を養うことである。道徳性を養うためには、道徳的価値を自分との関わりでとらえたり考えたりする必要がある。自分との関わりで考えられなければ、よりよく生きようと考えることができないからである。「自分との関わり」とは、これまでの自分の経験やそのときの考え方、感じ方と照らし合わせることを指す。

これまでの道徳の授業の課題として「読み物教材の登場人物の心情理解に終始する授業」が挙げられる。教材を読み、書かれていることから主人公の心情を理解し「どのような気持ちだったか」を考える授業である。このような授業では、「自分はどうかな」「こんなとき、こんな気持ちになったよ」と自分と関わらせて考えられることは難しい。読み物教材を使用する授業では、子どもは与えられた文章から主人公の心情を読み取ることに終始しがちになるからである。教科化により副読本が教科書となる今、読み物教材を使用してこれから求められる道徳科の授業を構想する必要がある。

そこで、私は読み物教材を使って「自分と関わらせながら考え、議論する授業」を構想する。そのためには、授業の導入段階から自分と関わらせて考えさせる必要がある。自分と関わらせながら、教材と出会い、友達の考え方、感じ方との違いに気付くことでよりよく生きていこうと考えを深めることができるからである。

私は、5学年の道徳において**考え方や感じ方の違いを基に、自己の生き方について考えを深める子ども**を目指す。「自己の生き方について考えを深める子ども」とは、もともと持っている道徳的価値に対する考え方、感じ方を自覚し、学習を通して考えたことに気づき、これからの自分の生き方について考える子どもの姿である。

目指す姿を具現するために次のようにする。

- ① 読み物教材の登場人物を自分との関わりで考えられるように、登場人物の置かれている状況や場면을再現する。
- ② 教材の場面や現象を多面的・多角的に考えることができるように、立場を変えて道徳的価値を見つめ直す場を設定する。
- ③ 自己の生き方について考えさせるために、もともと持っている価値観と、考え、議論した後の価値観とを比較させ、考えの深まりを実感させる。

このような視点で授業を改善することで、目指す姿を具現していく。

2 本研究で育む資質・能力

	①知識や技能	②ツール活用能力	③見方や考え方	④態度
道徳	○道徳的価値	○友達の考えと自分の考えが比較できる表(板書)	○物事を多面的・多角的に考える ○経験に基づいて考える考え方	○よりよい解決に向けた態度

3 主張する働き掛け

子どもは、自分の生活経験から自分なりの価値観を持っている。このような子どもに、C0の状態を表出させるために、次のように働き掛ける。C0を表出させるのは、子どもに今の状態を自覚させ、話し合いを通して考えが深まったことを自覚させるためである。

働き掛け1

子どもにとって身近な教材の前半場면을提示し、登場人物の関係を問う。

道徳的価値についての個々の価値観を表出させるための働き掛けである。

教材の前半場面を読み聞かせる。子どもには、文章を与えずに場面絵を示しながら教材を読み聞かせる。登場人物の心情を文章から読み取ることなく自分の経験から想起しやすいようにするためである。教材の場面は、子どもにとって身近なものを設定する。子どもにとって身近な場面を設定することで、自分との関わりで考えさせるためである。

教材の前半場面を提示して、登場人物同士の関係を問う。提示する教材の前半場面は、子どもの生活に身近なものであり、共感しやすいものである。提示して「このような関係をどう思うか」と問う。子どもは、教材の場面と自分と友達との関係を想起して道徳的価値に関わる考え方、感じ方を表出する(本研究のC0)(資質・能力①(道徳)「道徳的価値に支えられた価値観」)。

働き掛け2

教材の後半場面を提示し、(教材の中の)相手の気持ちを問う。

問いをもたせるための働き掛けである。

教材の後半場面を読み聞かせる。提示するのは、前半場面とは異なり問題が起こることで登場人物の関係が悪くなる場面である。子どもは「何があったのだろうか」「どうしてそうなったのだろうか」と登場人物同士の関係の変化から原因を考える。続けて、原因となる主人公の行為と状況を提示する。子どもは「これではダメだ」と主人公の行為についてに対して問いをもつ(資質・能力③(道徳)「経験に基づいて考える考え方」)。

働き掛け3

主人公の行為の問題点を問う。

道徳的価値について新たな見方、考え方を発見させるための働き掛けである。

主人公の行為がダメだと考えている子どもに「主人公が取った行為の何が問題なのだろうか」と問う。子どもは、主人公の行為に目を向け、問題点とその理由を考える。ここで、出される主人公の行為に対する問題点を焦点付けて議論させる。これにより子どもは、**物事(教材の場面)を多角的に考えて**問題点を考える。それぞれの立場で発表することや理由を**分類整理して板書する**。子どもは、行為とその意味を関係付けて考え、道徳的価値についての新たな見方、考え方を発見する。

働き掛け4

同じような場面に会ったら、自分だったらどうするかと問う。

自己の生き方について考えを深めさせるための働き掛けである。

主人公の行為を通して新たな発見をした子どもに、「同じような場面に会ったら、自分だったらどうするか」と問い理由も記述させる。子どもは話し合ったことを想起して、自分だったらするだろうと思う行為とその理由を考える。具体的な行為は様々だが、理由には相手が置かれている状況や気持ちを考えて行為を選択したことが述べられる。このようにすることで、**相手が置かれている状況を考え、自己の生き方について考えを深める子ども**になる。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。
- ③ 子どもは発揮した資質・能力を自覚することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、ワークシートの記述から検証する。
- ② 働き掛け3を受けて、発言やつぶやき、ワークシートの記述から検証する。

5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業(7月) 「同じ言葉でも…」(1時間)
- (2) 中間検討会(9月) 「誠実とは…」(1時間)
- (3) 初等教育研究会(2月) 「相手に心を寄せること」(2時間)